

達磨宗に関する補足事項

高橋 秀 榮

はじめに

筆者が「鎌倉初期における禅宗の性格(序)^①」と題して、大日房能忍を開祖とする達磨宗に関するささやかな内容の論文を学術研究誌に発表してからすでに四〇年近い歳月が流れた。顧みると、この論文を執筆した当時、達磨宗に関心をよせる研究者は意外と少なく、また達磨宗の消長を主題とした内容の先行論文も十指に満たぬ状況であった^②。そのため、筆者はもっぱら鷲尾順敬^③、大久保道舟^④、辻善之助^⑤博士らが執筆された論文などをいくども幾度も読み返して、達磨宗教団の維持や発展に寄与するところがあつた僧徒の動向などを念頭に置きながら、自分なりに問題点をさぐり出そうとしていたのである。筆者の処女論文は、奇遇にも柳田聖山博士の目に止まつて評価され、それが大きな励みとなつて、その後「大日房能忍と達磨宗に関する史料^⑥」を掲載する機会を得たのである。その史料集は鷲尾、大久

保、辻博士らの研究成果に所引された種々の文献や資料の要文記事を母胎とし、さらに筆者が勤務していた神奈川県立金沢文庫保管の鎌倉時代の写本聖教類から拾い集めたいくばくかの珍しい要文を付け加えたものにすぎなかったが、ごく一部の禅宗研究者に、一つの手引き、簡便な道具として活用していただけたらしい。

学問上のある恩師から、「高橋君、論文というものはどんなに論証を尽くして書いたところで、いつかは色あせてしまふけれど、資料というものは特有の価値があつて、いつまでも残るよ。資料はいいよ。」と、諭し励まされたことがあつたが、そのひと言は千金の重みをもつて、いまま筆者の耳の底に残つており、研究に取り組む上での大きな支えとなつてゐる。筆者が、日本仏教をテーマにした長編の論文を書くより、鎌倉時代の写本聖教の資料紹介、ないしは資料の翻刻に終始しているのも、じつは恩師のそのひとことに起因するところが大きいのである。人として生まれ、

さらに学術研究の分野に身を置く者にとつて、もつとも願わしいことは、善き師友（学究者、研究者）と善き書物（資料、聖教）にめぐりあふことである。その感慨は、いまま変わらず抱き続けている。

ところで、時節光陰は矢の如し、の喩え通り、達磨宗に関する史料集めいたものを作成公表してから早くも三〇年以上の歳月がながれた。この間、達磨宗に関心を寄せる研究者は数を増し、また新たな関係資料も発見され、それにともなつて研究成果も格段と増え、今では外国にも達磨宗の研究者が存在すると仄聞するほど、達磨宗に関する研究は大いなる進展をみたようである。筆者が能忍の信仰活動に興味を覚えて、わずかばかりの関係論文を涉猟し、通読していた時期と比べるとまさしく隔世の感がある。

さて、達磨宗に関わる珍しい資料や重要な文献、さらには関連する要文記事は、いまなおあいついで発見されている状況であり、おどろきを隠せないでいる。いったいぜんたい、どんな資料が新たに見つかり、また要文記事が補足できたのか。本稿では、その近況報告をさせていただくことにした。先ず最初に九つの補足事項を箇条書きの標題で示すならば、

一、名古屋の真福寺から「能忍」「無求尼」に関わる禅宗聖教が新たに発見されたこと。

二、達磨宗門徒の「覺晏」はもと比叡山の僧侶であつたこと。

三、「覺晏」の四百年忌にちなみ、誠拙周樗が法語を捧げていること。

四、快慶作阿弥陀如来像の像内納入文書にも「能忍」の名がみえること。

五、達磨宗門徒の「聖順房範永」は大和の正曆寺に住み、清涼寺式釈迦如来像を造立したこと。

六、応仁の乱で廢墟となる以前の摂津中嶋の三宝寺には子院がいくつもあつたこと。

七、『大徳寺夜話』に「大日上人」の名による関連記事がみえること。

八、長野県大昌寺所蔵の『室中秘書』に「能忍」に関する記事がみえること。

九、「拙庵徳光賛達磨画像」の模写一幅（寸松庵旧蔵）が売立てに出たこと。

などである。以下、箇条書きの順にそつてそれぞれの内容、趣旨を簡単に解説していきたいと思う。

一、名古屋の真福寺から「能忍」「無求尼」に関わる禅宗聖教が新たに発見された

平成二〇年六月中旬、筆者は東京大学の末木文美士教授から、名古屋の真福寺宝生院大須文庫から「能忍」「無求尼」の名が記された達磨宗関係の新たな写本が発見されたこと、

そしてその写本は、金沢文庫所蔵の『伝心法要』と同じ内容の禅籍であるという趣旨の電話をいただいた。

能忍を開祖とする達磨宗に関する文献、資料や論文による研究成果は、昭和六十四年までにほぼ出つくした感があったが、さらになお平成時代に入っても、史実解明に結びつく鎌倉時代の新たな古写本が発見されたとなれば、幻の禅宗一派ともいべき達磨宗の実態解明に一石を投ずる画期的な発見ということになる。まして「無求尼」といえば、『瀉山警策』の出版に寄与した尼僧、あるいは大乘寺本『六祖壇経』の奥書にみえる尼僧のことが即座に連想されるだけに、大きな驚きを覚えた。と同時に、目下、下火になりつつある達磨宗の研究がこれを契機にふたたび日の目をみることになるかも知れないとの大きな期待を抱いたのである。

七月十八日、名古屋大学教授阿部泰郎氏の並々ならぬ力の入れようで開催された真福寺大須文庫を会場にしたプレ・カンファレンスと銘打った研究会では、栄西と能忍に関わる新出資料の展覧と資料調査に携わった末木文美士、牧野淳司、米田真理子、和田有希子氏ら四氏の調査報告が行なわれた。

筆者がもつとも関心を寄せている能忍の達磨宗関係資料については、和田有希子氏から報告があり耳を傾けた。この時の報告要旨は、当日配布された報告書⁷⁾に詳しく掲載さ

れているのでそれを参照されたい。

さて、新出した禅籍資料の一番の注目点は、『伝心法要』＋『宛陵録』＋『書名未詳（かな書き法語集？）』の三巻一冊の装丁になる写本の禅籍で、しかも四十二紙目に「文治五年、遺宋使帰朝時、宋国佛照禪師、送遺新渡心要、有先段無後段、而奥有此伝心偈等、己上十八行二百七十七字是秘本歟。大日本国特賜金剛阿闍梨〔能忍〕、為弘廻之、広灯心要後段了彫繼之也。後賢悉之。彫料浄施財者尼無求」という原本刊記の文章が書き写されていることであつた。

『伝心法要』と『宛陵録』の二巻を一冊に書写し綴じた写本はほかにも存在するが、『伝心法要』＋『宛陵録』の末尾に「かな書きの法語集」らしい書名未詳のテキストを一冊に綴じ合わせた禅宗関係の書物の存在はこれまでに見たことも聞いたこともないもので、実に珍しい禅籍である。さらに驚きを禁じえなかつたのは、『伝心法要』＋『宛陵録』の末尾に記された奥書であつた。「文治五年」という年号は、宋版の『伝心法要』がわが国に伝来した年次を語るものであり、「能忍」と「無求尼」の二人の僧尼名をまじえた文章は、その後の模刻版本と関わるものと考えられる。おそらく無求尼の施財をもとに、和版による『伝心法要』＋『宛陵録』の刊行が完成したのは建久年間のことかと推察される。

ところで、この奥書からは、示唆に富むいろいろな情報を読み取れる。まず第一に注目すべきは『伝心法要』の書

名が「心要」と略称されていることである。筆者は、この略称はきわめて重要だと思ふ。というのは、能忍の高弟の覺晏が「心要提示」と題する書物を著わしていたということと関連性があるように思えてならないからである。いまは類推にとどめておきたいが、覺晏の「心要提示」と題する書物は、もしかすると『伝心法要』のことであつたのではないか。第二に注目すべきは、能忍の肩書きが「大日本国特賜金剛阿闍梨能忍」というように、密教僧のそれであるということである。能忍が天台密教を学んだ僧侶であつたことは、『溪風拾葉集』の記事からある程度予測がついていたが、新出資料の禅籍の奥書から、その点が明白になつた。

ところで、『伝心法要』＋『宛陵録』の二巻一冊という書冊形式をとるテキストは、宋版、五山版、写本のいずれにおいても同じである。例えば、福州開元寺版宋版一切経の中に収録されている『伝心法要』（南宋時代の紹興十八年に開版した題記がある。また内題と尾題の下には千字文の「實」字が刻まれている）は、一折六行、一行十七文字の配分で、全十八紙を数える折帖装の版本であるが、これには「黄檗断際禅师宛陵録」の内題、尾題があり、『伝心法要』（本文は第一紙から十二紙まで）と『宛陵録』（本文は第十二紙から終わりの十八紙まで）の版式によるテキストである。また第十三紙目の柱（版心）には、「實 法要宛陵録 十三 王英」の細字刻銘があり、『伝心法要』と『宛陵録』は二巻

一帖の形態を採る折帖であつたことがここからも確かめることができる。この点は京都の知恩院所蔵本の一切経も同じである。ちなみに金沢文庫保管の宋版本は、前二紙が欠落しているが、本文に訓点、返り点、送り仮名など、学習の跡が認められる善本である。

一方、わが国で印刷された『伝心法要』は、『宛陵録』と合併調卷された二巻一帖の形態を採る折帖本である。これには、(1) 弘安六年刊行の『伝心法要』（大東急記念文庫所蔵）、(2) 正安四年（一三〇二）刊行の『伝心法要』（金沢文庫保管）、(3) 刊年不詳の『伝心法要』などがある。ともども宋版一切経の構成に倣つて、『伝心法要』の末尾に『宛陵録』を添付する書冊形態の禅籍となつている。(1)(2)の両本はともに二巻一冊本の構成で、片面九行×十六文字の同版である。ただし罫線の有無に相違点がみられる（大東急本は毎丁に罫線を付すが、金沢文庫本は無罫線である）。それに対して今回発見された大須文庫本の「黄檗断際禅师宛陵録」は、宋版一切経の版経、ならびに鎌倉時代に印刷された版本と内容は同じであるが、相違点も少なくない。宋版一切経は、一行十七文字であるが、和版本は一行一六文字である。大須文庫本は片面一〇行、一行あたり十七〜十八文字の配分で書写された冊子本である。文中に施された返り点、送り仮名が、金沢文庫保管の宋版一切経や五山版のテキストに施されたものと違う。また「宛陵録」の末文が省略されて

いる。加えてもつとも大きな相違点は、大須本には、末尾に「能忍」「無求尼」の名を刻んだ文章（おそらく印刷本の刊記に相当するもの）があることである。これが大きな要素である。しかし残念ながら書写奥書が無い。

奥書というのは、一冊の書物が、いつ、どこで、誰によって、何のために筆を染めて出現することになったか、ということとを記録した文章で、書物誕生の来歴を語る重要なものである。ところが大須本には本文の最後を飾る一紙と裏表紙がいまだ発見されていないがためでもあるが、その肝心な書写奥書が見当たらない。いつ、どこで、誰が、書写した禅籍なのか、この点が明らかでないのが返す返すも惜しまれてならない。

ところで、能忍が在世中に、拙庵徳光から『瀉山大圓禪師警策』（以下、『瀉山警策』と略称）と題する宋版本の禅籍を贈られたといい、その末尾には「此書者、宋国明州廣利禪寺長老佛照国師、付遺宋使所恩賜也。日本国能忍令離板、願弘道矣、施淨財者尼無求」という文面の刊記が刻まれているということである。しかしながら、この宋版本の遺存を聞かない。古来の印刷本を集大成した大型の図書にも、その図版が掲載されたものがない。原本はいったいどこにあるのだろうか。全国各地の寺社に所蔵されている文化財の調査報告書を丹念に開いても、いまだにその存在を確かめることができない。能忍の帰依者の無求尼が施財者

となつて印刷されたと伝える和版本の『瀉山警策』も、また底本に用いたはずの宋版本も目の当たりにした人がいないようである。いったい、その禅籍はどこに秘蔵されているのであろうか。この点については、禿氏祐祥氏が早くから疑問をもたれていて、「禅籍の初出は建久年間に能忍の開版した瀉山警策であるといわれているが、この刻本について充分に能忍研究しなければ信用出来ない」と指摘されていたほどである。筆者も以前からどうも疑わしいなあと感じていたので、ある時、書誌学の泰斗川瀬一馬氏に直接質問したところ、「それは西村兼文の偽妄かもしれない」との返答を受け、それならばいたしかたなしと納得したことを記憶している。となると、古来、能忍は『瀉山警策』の刊行者と伝えられているが、じつはそのような書名の禅籍は印刷されなかったのではあるまいか。

尼無求が『伝心法要』の刊行にかかわっていたことは、今度の新出写本の発見で明白になった。もしかすると、尼無求の施財による禅籍の刊行は『伝心法要』だけであつて、『瀉山警策』の刊行とはかかわりがなかったのではあるまいか。というのは、達磨宗の宗風、ないしは教学をさぐる上で重要視されている『成等正覚論』をはじめ、その他の関係文書を丹念に読みほぐしても、いつこうに『瀉山警策』の要文の引用が見いだされないからである。達磨宗の門徒にとつて、重要視された禅籍の一つであるならば、必ずや

どこかに一文半句なり、引用されていてもおかしくないと思ふのであるが、その痕跡はまったく見当たらない。例えば、真言僧の頼諭が著した『顕密問答抄』という聖教を見ると、その文中には、「宗鏡録」「伝心法要」「首楞嚴經」「血脈譜」など、達磨宗がよりどころとしたのと同じ書名の禅籍の要文が引用されているが、『瀉山警策』の書名は一度も見出されない。じつに不自然であり、不可解である。

達磨宗の開祖能忍ならびに覺晏を筆頭とする門弟らは、最澄の『内証仏法相承血脈譜』、安然の『教時義』や『教時諍論』あるいは中国で著された『六祖壇經』『伝心法要』『宛陵録』『宗鏡録』『首楞嚴經』などを書写し学習していた可能性がよりいっそう高くなった。本書の出現は、能忍の事跡とその禅風の研究に新たな光彩を加える基本資料ともいえるもので、まことに貴重である。

二、達磨宗門徒の「覺晏」はもと比叡山の僧侶であつた

達磨宗の開祖能忍の門弟で、教団の継承者であつた覺晏の経歴はほとんど知られない。生没年も、家系も明らかでないし、出家の時期やその動機も、また修学の足跡、修行の経歴など皆目知られない。京都八幡市の正法寺（能忍の甥の平景清の墓所の一つとの伝承もある）には鎌倉時代の

古文書など複数の達磨宗関係文書が残っているが、覺晏の名が明記された文書、記録類は皆無である。もちろん覺晏の行状記も存在しない。

ただわずかに、徹通義介が瑩山紹瑾に与えた『嗣書之助証』にその名がみられる程度で、それを通じて、能忍の後を継いで、京都の東山から大和の多武峯に布教活動の場を移し、達磨宗の存続に寄与するとともに、門弟の懐契に『首楞嚴經』の「頻伽瓶」の比喻を提示して、見性成仏の奥義を省悟させた豊かな見識と指導力のあるすぐれた禅者であつたということと、著作に『心要提示』というものがあつたということが伝わっているだけである。しかしその著作も、はたしてどんな内容の書物であつたのか、今日に伝存せず、その人物像の真相解明が待たれつづけているわけである。

しかしながら、先年、この人物の経歴に関して一つだけ明らかになつたことがある。それは金沢文庫が保管する鎌倉時代の『法華文句第二雜見聞』四月十六日始之」と題する聖教の中に、「仏地房、首楞經、始テ点スト云々、本山僧」とあつて、仏地房すなわち覺晏が「本山僧」Ⅱ（もとやまのそう、もとさんぞうと発音し、元來比叡山の僧Ⅱ本來比叡山の僧の意味）であつたことが明らかになつた。⁽¹⁾

覺晏が天台宗の僧であつたことは、かなり以前に、村上素道氏が「當時多武峯に覺晏和尚といふ方があつて、此方は原と天台宗の人であるが」と記しており、一部の研究者

には知られていたが、より具体的に比叡山出身の天台僧であつたことが、由緒確かな鎌倉時代の写本聖教の中にその証拠が見出されたことは大きな収穫とならう。

覚晏が叡山の僧であつたという事実から、新たな考察の糸口が開かれてくるような気がしてならない。例えば、鎌倉時代の初期に禅の信仰布教をめざした僧侶の多くは叡山で頭密二教を修学した経歴をもつ人々である。栄西を筆頭に、能忍、覚晏、道元、懷奘らの名をあげることができる。この人々は大なり小なり、叡山での修学中に、中国では禅宗がすこぶる隆盛である、との新しい情報を得ていたかもしれない。あるいは人づてにも最新情報を共有しうる環境の中に身を置いていたかも知れない。よしや時期的に多少のずれがあるかも知れないが、あい前後して、叡山にて修学していた経歴をもっていた可能性は考えられる。

筆者は、入唐帰朝の経験をもちながら消息を絶つた覚阿と、達磨宗の覚晏の二人の關係に注目しているのであるが、二人ともに関係資料が乏しく、研究が阻まれているが、それぞれの法名に「覚」の文字がついていることにも注目するのである。覚晏が叡山の僧であつたという事実からして、覚阿―能忍―覚晏という三人の禅宗志向の流れが一本の線であつたような気がしてならない。平安末期から鎌倉初期にかけて、覚阿が叡山に齎した禅籍が能忍の眼にふれて禅宗一派の新規開宗を促し、その動向に覚晏は従つたとす

る図式が考えられはしないか。

三、「覚晏」の四百年忌にちなみ、誠拙周樗が法語を捧げている

江戸時代の文化十三年（一八一六）に鎌倉円覚寺の住持になり、百廃を一興したという傑僧誠拙周樗（？―一八二〇）の『誠拙禪師語録』に、「熊嶽開祖仏地禪師四百年」と題した「拈出す。禪師は東嶽の真、分明に是れ旧時の人にあらず。傷風、今日、序髪するに慵し。惹き得たり、満堂一笑の新たなことを。」という法語一編が収録されている。とりたててどうということもない内容の法語であるが、標題に「熊嶽開祖仏地禪師」とあるのが注目される。

「熊嶽開祖」といえば、先ずはインドから中国に旅して、禅を伝え、没後、熊耳山に埋葬されたと伝える菩提達磨その人のことが連想されるが、それに続けて「仏地禪師」と明記されているから、ここは中国禅宗の開祖、達磨大師その人のことではなく、わが国の鎌倉時代初期に、天成の禅者能忍によつて開かれた達磨宗の高弟、仏地房覚晏（生没年不詳）に対する尊称と理解される。

この法語の内容の良し悪しはともかくとして、重要なのは、江戸時代下つてもなお達磨宗のこと、およびその門下にいた仏地房覚晏の存在が忘れられていなかったという

歴史的事実である。しかもその法語は、道元下に参学してその後の教団を守り立てた達磨宗出身の経歴を帯びた曹洞宗の僧侶によるものではなく、臨済宗の禅僧に関心がもたれていたという事実が注目されるのである。

近時、石井修道氏の研究により、達磨宗の開祖能忍の禅は、「臨済宗大慧派の宗風ではなく、唐代禅に近い」ものであったことが明らかにされたが、この法語をみるところ、江戸時代においては、能忍が開いた達磨宗は、中国の臨済宗の系譜に列なる禅宗の一派と理解されていたことがわかる。

ちなみに仏地房覚晏の房号に関して、ひとこと補足しておきたいことがある。例えば、鎌倉時代に法華経信仰を力説した日蓮は、念仏宗の法然と達磨宗の能忍とを並びあげて、その宗教活動を注目していた人物でもあったが、『教機時国抄』という著作の文中には、「大日仏陀、禅宗を弘め」という一文が記されている。¹⁵この文章をどう読むか、どう解釈するか。「大日仏陀」を大日房ただ一人のこととみるか、大日房と仏地房の二人とみるか、研究者の間で二つの解釈が生まれていたが、宮崎英修氏は、大日と仏陀の間に中黒点を施して、大日房能忍と仏地房覚晏（仏陀＝仏地）の二人のことであると解釈された。筆者はその説に賛同したい。

日蓮は、三人の僧名を表記するにあたっては、源空、能忍、

覚晏という法名を用いず、法然、大日、仏地という房号で表記し、区別していたのであるが、たまたま仏地の房号を仏陀と書き誤ってしまった、と解釈することができからである。¹⁶してみると、右の法語の表題にみる「熊嶽開祖仏地禅師」すなわち仏地房覚晏の達磨宗開祖ということはあるが、四百年後の追善供養の時点においては、達磨宗の開祖に匹敵する高僧とみなされ、その記念の遠忌に心寄せる僧侶から追慕され、法語一篇を手向けられたようである。

いまここでは、これ以上の考察を省くが、江戸時代になつてもなお達磨宗の宗風活動に尽くした門弟の存在は忘れ去られていなかったという事実、そして臨済宗の禅僧誠拙周樗が、仏地房覚晏の四百年供養にちなんで法語を献じたという事実は十分に注目していいだろう。

四、快慶作阿弥陀如来像の像内納入文書に

「能忍」の名がみえる

京都市北区鷹峯光悦町に所在する遣迎院の阿弥陀如来像の像内から発見された「如来立像印仏」（建久五年六月二十九日始之）の端書がある印仏も混在）の中（No.5-1）に、「仏師快慶、重源、栄西、鏝阿」らの名にまじって「能忍」の名も記載されている。さらには、能忍の門弟かとも

なされる蓮阿弥陀仏、観照、定観らの名前も見出される。¹⁷⁾

この印仏など七十三紙に列記された一万二千余名にのぼる結縁交名を解説、翻刻し、さらにその内容をこまかに分析された青木淳氏の解説によれば、遣迎院は、法然の弟子の証空に帰依した藤原道家が正治元年（一一九九）に建立した寺院で、その当初、寺地は東福寺の近くで、三ノ橋南にあったが、歴史を重ねて、昭和三〇年に現在地に移ったという。鎌倉時代の初めに創建された遣迎院が、その当時、東福寺の近くにあったということは、達磨宗の布教拠点の一つであった東山に隣接していた可能性が高いということになる。

法然の門弟が『宗鏡録』の内容に関して能忍と問答したという記事があるが、それなども遣迎院の阿弥陀如来像との縁をもっていた能忍との絡みで真実性が高まってくるように思われる。その東山の信仰活動のエリアに両寺が隣接して存在していたならば、藤原道家が発願した仏像の造営完成を祈って、応分の喜捨を施し助けるといふ善行は実現可能であったとみなされる。¹⁸⁾

あわせてこの印仏に能忍の名が記されていることの重要さは、能忍が少なくとも「建久五年（一一九四）六月二十九日」頃までは確実に存命していたことを裏付けるものであり、『百練抄』に「在京上人能忍」と記されている記事とも深い関連性があるかとも考えられる。年号が明記された印仏が

わずか一枚だけ、というのが何とも心もとないが、建久年間ころ、能忍が京都の東山界限に独自の宗風をひろめるための地盤を築きつつあったことを裏付ける一つの証ともなすることは疑いないであろう。

五、達磨宗門徒の「聖順房範永」は大和の正磨寺に住み、清涼寺式釈迦如来像を造立した

能忍を開祖とする達磨宗の初期教団にはさまざまな僧尼が混じっていて、宗風を鼓吹していた。能忍の不幸な死に直面して、教団の存続が危ぶまれましたが、その後を継いだ覚曇らの努力によって教団の維持が図られていたらしい。

能忍の没後に、一部の僧尼の離散もあつたようであるが、弟子から孫弟子へと法の相続が行なわれ、おおよそ室町時代の初頭、応仁の頃までは、摂津三宝寺における布教活動は継続されていた。そのことは京都八幡市正法寺所蔵の関係資料を通じて明らかになった歴史的事実である。¹⁹⁾

ところで、門弟の離散ということにちなんで一つ補足すべきことがある。それは能忍の没後に、摂津三宝寺で達磨宗の宗風を学び、舍利信仰を育んでいた聖順房範永という僧が、その教団を離れて、大和の正磨寺（菩提山寺とも呼称する）に移り、清涼寺式釈迦如来像を造立しているという新たな事実が見つかったことである。それは、岐阜県本

巢郡巢南町の即心院に伝わる古い仏像の修理を通じて、その像内から取り出された鎌倉時代の文書に記された文面から明らかにした次第であるが、きわめて注目すべき事柄と思われる。

この仏像の調査に当たられた成城大学学長の清水真澄氏の論文²⁰によれば、その像は来迎印を結ぶ阿弥陀如来像で、全身薫香に覆われていて、全身に施されていた金泥、彩色、切金模様もほとんど見えない状態であったということであるが、頭髮と衲衣の形態から清涼寺式釈迦如来像であることが明白に判断されたので、当初の像容に戻す修理を行なったところ、その像内から「文応元年申五月十四日、大和国菩提山寺□□□院、施主範永聖順房此造立畢、□法界□（衆か）生平等利益并四恩法界、覚円仏子造之、□平等々々利益敬白」と墨書きされた文書一紙が発見されたというのである。清水氏は文字が虫に食われていて判読できなかった箇所を□にされているが、筆者が推定するところ、菩提山寺の下の□□□院はおそらく「四十九院」、造立畢の下の□法界は、「為法界」の文字が書かれていたのではないかと思われる。

ところで、筆者がこの仏像と納入文書に特別に関心をよせるのは、仏像のすがたかたちが清涼寺式釈迦如来像であることもさりとて、その造立発願の施主が聖順房範永という僧侶であったからである。この人物こそ、じつは能忍を

開祖とする達磨宗ともかかわりがあつた聖順房範永その人にほかならないことが判明したからである。清水氏からこの論文を頂戴し、拝読したところ、なんと見覚えのある聖順房範永という僧名が見いだせるではないか。背筋に電気が走るかのような驚きを覚えた記憶がある。というのもかなり以前のことになるが、奈良国立博物館で開催された特別展「舍利信仰の美術」で目にした京都八幡市の正法寺所蔵の文書の中に「範永生年三十八之年、自一蓮御房普賢光明御舍利一粒処分給畢、件御舍利元者心蓮御房御所持也。数三十七粒也。（中略）寛喜二年十月七日、金剛仏子範永（花押）聖順房証文（端裏）」と記された文書のこと、強烈に思い出されたからである。聖順房という房号、範永という僧名は特異なものであり、筆者にとつては忘れがたい鎌倉時代の僧侶の一人でもあつたからである。

納入文書の筆跡や文章を丹念に目で追いながら、どうして達磨宗教団に加わって禅を学んでいた聖順房範永が、いつ、いかなる事情から、菩提山寺の山内の一院（四十九院か）に移り住み、慶派仏師の一人と推定されている覚円に清涼寺式釈迦如来像の模刻造立を注文する施主となったのか。右の文書の文面からはその真相を探り出すことはできないが、いかなる理由でという疑念解明は今後に課せられた一つの問題点となろう。

範永が達磨宗の教団から離れた時期は不明であるが、普

提山寺の山内に移り住むようになったのは、かなりの年齢になってからのことと推察される。というのは、正法寺所蔵の文書に、寛喜二年（一二三〇）の時、範永は三十八歳であったと明記されているから、文応元年（一二六〇）には、六十八歳になっていたかと思われる。いったいそれまでの間、範永はどこで、何をしていたのであろうか。

ところで、範永が晩年に移り住んだ菩提山寺は、藤原忠通の息子の信円が鎌倉時代のはじめに再興した法相宗の寺院で、春日信仰とも格別縁が深かった寺院である。清水氏によれば、その春日信仰との深い絆から、律宗系と異なる像容形式や全身に金泥、彩色、切金を施した特殊な表現による清涼寺式釈迦如来像の造立が計られたとのことである。

すでに知られるように、鎌倉時代は清涼寺式釈迦如来像の模刻が流行した時代であるが、かつて能忍、覺晏師弟が開創した達磨宗に学んだ経歴をもつ範永が仏師寛円に清涼寺式釈迦如来像の模刻を依頼した事実は注目している。達磨宗の宗風に馴染んだ足跡がある僧が教団を離れた以後にそのことを成し遂げていることはこれまでまったく話題にならなかったことがない。仏像の像内に納められた一枚の文書が発見されてはじめて歴史が明らかになるという好き一例である。

ところで、達磨宗の本拠地であった摂津水田の三宝寺の

本尊はいったい何であったのだろうか。従来、この点についてはほとんど考察されることがないが、一度、検討してみる必要がある。はたして拙庵徳光自贊の達磨画像が本尊的な役割をになつていただけなのか、ほかに木造彫刻の釈迦如来像とか、普賢菩薩像とかが安置されていたのかどうか、三宝寺という寺名呼称、三宝寺に伝来した六祖普賢舍利という法宝とも関連させながら多少考察してみる必要がある。達磨の画像とはべつに本尊仏が安置されていた可能性が高いのではあるまいか。この点をさぐることもまた今後の研究課題の一つである。

六、応仁の乱で廃墟となる以前の摂津中嶋の三宝寺には子院がいくつもあった

三宝寺の子院については、原田正俊、西岡秀爾両氏の論文に詳しい。⁽²²⁾ことに原田正俊氏は、寛正二年（一四六一）二月二十六日付けの「中島崇禪寺領目録」という史料の内容を検討し、「崇禪寺領の名請人の中に三宝寺を始め子院塔頭の名がみえ、すなわち三宝寺には、妙観院、弥勒院、西光院、千手院、大日院、地藏堂、遍照院、葉師堂、吉祥院等が存在した。」し、さらにまた「崇禪寺領の四至に隣接して三宝寺田がいくつも見え、字名として三千沢・大沢・板加野・板加野外島開・平田・三千沢外島・総屋敷の辺りに

三宝寺の所領があつたことがわかり、三千沢等は乳牛牧内の字名で、三宝寺のすぐ近くの字と確認できるのでほぼ北中島北東部に三宝寺の所領が散在していたといえる。」とも指摘されている。

寛正二年（一四六一）といえば、三宝寺の開祖能忍の活躍した時代からは二百年後のことになるが、達磨宗の本拠地には、多くの所領があり、かつ仏、菩薩の名を付した寺院、塔頭に類する九つの建物が建っていたということは、その宗風が深く根を下ろし、定着していたことを裏付けるものであり、十分注意を払っていいことである。

その時期における達磨宗の発展を暗示させる出来事でもあり、当然のこと、御堂に安置されていた本尊の尊像形態も考察の対象になる。おそらくは時代が下つた時期の達磨宗の信仰活動は能忍や覺晏が在世していた時期の信仰活動とは様変わりしていた可能性も考えられよう。

七、『大徳寺夜話』に「大日上人」の名による 関連記事がみえる

『大徳寺夜話』に「大日上人伝禪法、於大惠弟子光仏照。後寺へ推出テ、魚肉ヲ入タ。地頭、依嫌之停止。虚空叫云、大日上人ハ、大明眼テ、魚肉ヲ寺ニ入テ、停止サスル曲事チヤ。如旧入寺サセヨト、其後復魚肉ヲ寺ニ入タ也。」（No.

一六三）という法語が収録されている。その書き出しにみえる「大日上人」とは、いうまでもなく、達磨宗の開祖大日房能忍のことであり、「大惠弟子光仏照」とは、大慧宗杲の弟子の仏照徳光のことである。

この法語は、「薫酒山門に入るを許さず」という標語を連想させる内容のものであるが、じつは仏照徳光から禅法を伝授した大日房能忍がすぐれた明眼の僧であるにもかかわらず、寺院に魚肉を持ち込むことを停止させた曲者（変人、異常な人）だと地頭が不満をあらわにし、大空にむかつて叫び声をあげるの、能忍はその不当な要求に折れて、以後、ふたたび寺内に魚肉を入れることを許した、という趣旨かと思われる。この言動の背後には、あるいは、逃亡中の平景清をもてなそうと、能忍が弟子に酒を買いに行かせたという有名な逸話を踏まえながら、逆説的に物語っているのかもしれない。これもまた文献には見当たらない珍しい内容の記事である。江戸時代になって、京都の名刹大徳寺で、能忍のことが物語られていたことを示す興味深い一話として注目される。

八、長野県大昌寺所蔵の『室中秘書』に 「能忍」に関する記事がみえる

長野県の大昌寺に『室中秘書』と題する写本が所蔵され

ており、その文中に「其ノ頃、筑紫ノ博多ニ能忍上人ト云マク。彼上人、遙大唐ノ育王山住ス仏照禪師ト云名師ヲ聞及テ、達磨宗ト成ウシト志シ、練中ノ勝弁ト云者ヲ育王山遣シ、徳光禪師ニ一片ノ心ヲナケキ、達磨ノ贊并法衣一張ヲ贈□也。其贊ニ云、直指人心見生成仏、大蔵劈ノ門ノ滄溟頓ニ渴、雖モ然徳ス神光ヲ争奈当門ノ齒□ヲ云々。能忍、此贊并法衣誇テ、日本ノ達磨宗ト号ス。其後、覺晏上人ト云貴僧一人アリ。彼能忍、御聞及テ博多ニ下テ弟子トナル、故ニ多武峯ノ達磨宗覺晏上人ト云ヒ伝ル也。此ノ事ニ(ヲ)惠監(懷鑑)坊聞及テ即捨テ我宗ヲ上ル洛陽ニ。二人ノ弟子ヲハ上セリ山。令落髮受戒。我身ハ上テ多武峯ニ、聞法禪、則チ受ク晏上人ノ弟子ト。」という記事が記録されている。奥書がなく、その書写年代が明らかでないのが残念であるが、従来に知られない記述内容だけに注目したい。中国の育王山の徳光から贈られた達磨の画像に付された贊文なども引用されているだけに注目に値する要文の一つとみなされる。ただし、当て字、誤字が少なくないので、十分、注意を払わねばならない。この記事をめぐる真偽検討は今後の課題にしたい。

九、「拙庵徳光贊達磨画像」の模写一幅 (寸松庵旧蔵) が売立てに出た

拙庵徳光から能忍に印可證明の証拠品として贈られた「朱衣達磨図」は、顎鬚を豊かにたくわえた僧侶の強烈な個性を表現した画幅である。画面上部には、「直指人心見生成仏 太華擘開滄溟頓竭 雖然接得神光 争奈當門齒闕、日本国忍法師 遠遣小師練中勝弁 来求達磨祖師遺像、大宋国住明州阿育王山法孫徳光稽首敬讚 己酉淳熙十六年六月初三日書」という徳光自筆の贊文が認められている。

昭和四十三年にこの画像を詳しく調査された徳永弘道氏は、その原本は兵庫県尼崎で古美術店を営む藪本莊五郎氏の所蔵品ということを明らかにし、あわせてその画幅は、絹本墨画着色で、法量はたて九十八、〇、よこ五二、〇センチの掛幅。箱入りで、箱口貼には、「渡辺家伝来、宋人徳光達磨画贊」と書かれていること、贊語は左勝手に書かれているが、赤外線写真を通じて贊文に欠落箇所があること、また後世の補彩があり、後人の補筆や入墨があつて伝来当初の美観をかなり損ねている作品であることを報告している。

ところで、鎌倉時代の初期に能忍に付与された徳光贊達磨像は、近世に大いに注目をあつめたようである。その模写作品がいくつか伝わっている。「原本あるいはそれに非常に

近い存在」である叡本氏所蔵のほかに、京都の天竜寺と東京青山の根津美術館にそれが確認されるとして論文で報告したことがあるが、さらにもう一幅、模本が存在することが判明した。すなわち京都の古美術商思文閣の売目録一―四号に写真入りで掲載されている。

解説によると、寸松庵旧蔵のものであるという。写真図版で見るところ、達磨の姿態、面貌表現といい、徳光の賛文といい、ほぼ同一で、模写本も原本に即して忠実に写されているように見えるが、原本に漂う厳しさは薄れ、柔和な顔立ちの達磨に写されていて、多少の物足りなさ、迫力に欠けるところがあるが、これもまた近世になって描かれたと推定される模写画である。

叡本本では、画像と賛文の間に余白というものがないのに、天竜寺と根津美術館と思文閣の三幅には、画像と賛文の間に大きな余白があること、叡本本に「傾竭」と記されている賛文の文字が、他の三幅では「頓竭」と書かれているという相違点が見いだされる。ちなみに賛文の表記上の意味からは、「傾竭」が適当と推察されている。

なぜにこの達磨画像は模写され続けたのか。今は類推にしかすぎないが、近世に茶道が盛んになり、床の間に飾る掛け軸にふさわしい一幅として愛玩されたからかも知れない。というのは、この達磨画像こそ、宋国からわが国に將來された禅宗祖師画の最初期の遺品であること、また画像

に添えられた賛文が南宋禅林の名僧、拙庵徳光の遺墨であることが格別に好まれたためではあるまいか。江戸時代に模写された徳光賛達磨像が三幅も遺存している事実は注目すべきことである。

撰津水田の三宝寺、京都東山の庵室、大和の多武峰、そして越前の波着寺などを拠点とした達磨宗の宗風は、惜しくも消滅してしまつたが、開祖能忍に関わる徳光賛達磨像は、茶道の世界に長らえて生き続け、歴史のひとこまを語りかけているのである。

おまげに

達磨宗の信仰活動の足跡、撰津中島水田における三宝寺教団の消長などに関しては、鷲尾順敬、大久保道舟、辻善之助、柳田聖山²⁶、石井修道²⁷、石川力山²⁸、船岡誠²⁹、中尾良信³⁰諸氏らの緻密精細な研究成果があり、おおよその終止符が打たれたかの印象を抱かれた人が多いかもしれない。ことに二〇〇五年に吉川弘文館から刊行された中尾良信著『日本禅宗の歴史と伝説』は、現存する関係資料を網羅した最新の成果で、もうこれ以上に追加される情報と進展は望めないかとも予想されたに違いない。だがあにはからんや、平成二〇年七月十八日に、名古屋真福寺大須文庫を会場にして展示公開された『伝心法要』＋『宛陵録』＋『書名未

『詳（かながき法語集）』の三巻一冊という書冊形式をもった写本の出現、そしてその禅籍の書誌解明を担当された和田有希子氏の報告発表は衝撃的なことで、反響も大きく、感慨もひとしおであった。

達磨宗の布教の実態を多少なりとも明らかにしたいと願う研究者は少なくない。筆者も先学の驥尾にふして関心を寄せてきた一人であるが、拾遺すべきものはまだまだある可能性がある。達磨宗にかかわる関係資料は、いつ、どこからひよこり出てくるか知れない。時には古寺の経蔵の中から、あるいは未修理の仏像の像内から発見される可能性が考えられる。岐阜の即心院に伝来した清涼寺式釈迦如来の像内から取り出された一通の文書からあらためて、種々の資料や関係する要文記事の拾い集めは、今後も継続していかねばならないとの思いを深くしたほどである。

それにしてもバラバラに離散していた『伝心法要』の写本を根気よく整え、当初の原型装丁に復元することをめざして悪戦奮闘された関係者（末木、和田、牧野、米田各氏）の努力を心から称えたい。

本稿は、東京大学の末木教授から達磨宗に関わる新たな禅籍の出現を知らされ、かつコメントを求められたことに促されて、書く意欲が沸き執筆したものである。末木氏に厚く感謝したい。この原稿を書き綴っていた折に、一周忌を迎えられた柳田聖山博士の追悼文集が届いた。博士は『祖

堂集』の世界的な研究者であられたが、また達磨宗研究の第一人者でもあられた。このささやかな内容の報告論文を博士の膝下に送付できなくなってしまったことを残念至極に思う次第である。

注

- (1) 高橋秀栄「鎌倉初期における禅宗の性格（序）」『宗学研究』第十三号、昭和四十六年
- (2) たとえば、佐橋法龍『道元の全一的仏法』『日本曹洞宗史論考』昭和二十七年）、今枝愛真『禅宗の歴史』（日本歴史新書、昭和三十七年）、嗣永芳照「日本曹洞宗に於ける大日能忍の達磨宗の消長」『書陵部紀要』第十八号、昭和四十一年）、矢島智津子「禅宗成立期における日本達磨宗の位置」『東洋大学大学院紀要』第六号、昭和四十五年）などが発表されていた程度である。
- (3) 鷲尾順敬「大日房能忍の達磨宗の首唱及び道元門下の関係」『日本及日本人』第三三八号、昭和十一年
- (4) 大久保道舟「道元禅師の僧団結成とその会下の僧衆」『駒沢大学学報』第一輯、昭和十六年
- (5) 辻善之助『日本仏教史』第三卷、中世篇之二（岩波書店、昭和二十四年）
- (6) 高橋秀栄「大日房能忍と達磨宗に関する史料（一）（二）」『金沢文庫研究』第二三九・二四一号、昭和五十二年

- (7) 和田有希子「新出初期禪宗聖教断簡の復元と研究」(『プレ・カンファレンス 真福寺大須文庫聖教展観―中世宗教テクストの世界―』(名古屋大学大学院文学研究科、平成二〇年)
- (8) 田島柏堂「日本曹洞印書史の研究」(『小出有三先生古稀記念論文集』昭和三十八年)
- (9) 『仏教考古学講座』第三卷
- (10) 千葉正「中世真言密教の禪宗観」(『宗学研究』第四十四号、平成十四年)
- (11) 高橋秀栄「私家版日本中世の天台僧人名辞典」(平成十七年)
- (12) 村上素道『永平寺二祖孤雲懷奘禪師』(京都永興寺内參禅会本部、昭和二年)
- (13) 鈴木省訓「訓註『誠拙禪師語録』その三」(『駒沢女子短期大学研究紀要』第二十三号、平成二年)
- (14) 石井修道「正法寺文書よりみた日本達磨宗の性格」(『仏教学』第三十五号、平成五年)
- (15) 『昭和定本日蓮聖人遺文』一四五頁
- (16) 宮崎英修「教機時国抄にみられる大日仏陀―大日仏陀と大日仏地―」(『大崎学報』第一三六号、昭和五十八年)
- (17) 『日本彫刻史基礎資料集成』(編纂者代表・水野敬三郎 鎌倉時代、造像銘記篇1、図版九十一頁、中央公論美術出版、平成十五年)
- (18) 青木淳「快慶作遣迎院阿弥陀如来像の結縁交名―像内納入品資料に見る中世信仰者の「結衆」とその構図―」(『仏教史学研究』第三十八巻二号、平成七年)。同「仏師快慶と天台関係の造像活動」(『日本宗教文化史研究』第七巻二号、平成十五年)
- (19) 高橋秀栄「三宝寺の達磨宗門徒と六祖普賢舍利」(『宗学研究』第二十六号、昭和五十九年)
- (20) 清水真澄「岐阜・即心院の清涼寺式釈迦如来像」(『仏教芸術』第二六〇号、毎日新聞社、平成十四年)。ちなみにこの仏像は、平成二〇年十月三日から十二月七日までの期間、神奈川県立金沢文庫での特別展「釈迦追慕」で展示された。
- (21) 中尾良信「撰津三宝寺関係史料」(『曹洞宗研究紀要』第十八号、昭和六十一年)。筆者は、奈良国立博物館の学芸課長であった河田貞氏から、写真の複写を提供していただき、この文書の文面を翻刻したため、端裏に「聖順房証文」の五文字の墨書があることを知らなかったが、後日、中尾氏がこの端裏をも丁寧に翻刻してくれたおかげで、即心院の仏像から発見された「聖順房範永」と達磨宗の關係文書にみえる「範永」とが同一人物であることが確かめることができた。
- (22) 原田正俊「達磨宗と撰津国三宝寺」(『有坂隆道先生古稀記念論集』平成三年)、西岡秀爾「撰津中嶋三宝寺とその周辺」(『印度学仏教学研究』第五十五巻二号、平成十九年)

- (23) 飯塚大展「龍谷大学図書館蔵『大徳寺夜話』をめぐって
(一)―資料編―」(『駒澤大学禅研究所年報』第十号、平成十一年)

昭和六十二年三月)
中尾良信「達磨宗の展開について」(『禅学研究』第六十八号、平成二年三月)

- (24) 朝日新聞社発行の古美術研究誌『国華』九二九・九三〇の両号に詳細な調査報告が掲載されている。

- (25) 高橋秀榮「大日房能忍に附与された達磨画像をめぐって」(『宗学研究』第二十九号、昭和六十二年三月)

- (26) 柳田聖山「日本達磨宗は何を説いたか」(人類の知的遺産16『ダルマ』、昭和五十六年九月)

- (27) 石井修道「仏照徳光と日本達磨宗―金沢文庫所蔵「成等正覚論」をてがかりとして―(上)(下)」(『金沢文庫研究』第二二二・二三三号、昭和四十九年十一月・十二月)

石井修道「日本達磨宗の性格」(『松ヶ岡文庫研究年報』第十六号、平成十四年三月)

- (28) 石川力山「達磨宗の相承物について」(『宗学研究』第二十六号、昭和五十九年三月)

石川力山「越前波着寺の行方」(『宗学研究』第二十八号、昭和六十一年三月)

- (29) 船岡 誠「日本禅宗史における達磨宗の位置」(『宗学研究』第二十六号、昭和五十九年三月)

船岡 誠「能忍と達磨宗の創唱」(『日本禅宗の成立』所収、吉川弘文館、昭和六十二年)

- (30) 中尾良信「能忍没後の達磨宗」(『宗学研究』第二十七号、

達磨宗に関する補足事項(高橋)